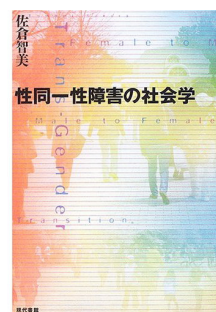


# REVIEW ESSAY

佐倉智美、2006

『性同一性障害の社会学』

現代書館



## 個体化主義の陥穽

——佐倉智美『性同一性障害の社会学』を読む——

森山 至貴

### 1 佐倉智美『性同一性障害の社会学』

本書評論文では佐倉智美氏（以下敬称略）の『性同一性障害の社会学』（現代書館、2006）<sup>1</sup>を取り上げる。トランスジェンダー〈当事者〉であり、日本のトランスジェンダーの運動を間違いなく牽引してきた佐倉が、「社会的な立場からトランスジェンダーに注目し、学究的な分析・考察に取り組んでみたい」（p.13）と宣言した上で書いたこの著作は、日本のトランスジェンダー運動の蓄積の上に立ち、さらにその蓄積を学問に接続させていく、重要なものである。エッセイなどが主流だったトランスジェンダーの「文筆業界」において、一人の著者による社会学の方法論に自覚的にのりつた（短い論文ではなく）一冊の書籍がはじめて出版されたことは重要であり、その意味でも佐倉のこの作業はきわめて重要である（佐倉の文章も「標準的な」社会学の文献よりはるかに平易で、エッセイに近いものではあるが）。

トランスジェンダーに関する運動の蓄積のもとに書かれたこの著作を論じるためには、トランスジェンダーの運動に関する知識が必要である。しかし、その豊穡さゆえ、運動の内実とはとてもではないが網羅した形で記述できるものではない。そこで、ここではトランスジェンダーをめぐる運動の主張のうち、本論文に関連する理論的なものとして、①同性愛との差異、②トランスジェンダーの多様性に関する2点を取り上げ、簡単にまとめておく。トランスジェンダーについて記述する際に最低限の基礎知識をまとめた上で、佐倉の著作の検討に移ることとしたい。

第一に同性愛との差異について述べる。トランスジェンダーの運動、特にトランスジェンダーの人々の可視化を目指す運動は、トランスジェンダーの同性愛からの差異化を一つの争点とした。基本的に女と自認する人が女を・男と自認する人が男を「愛する」同性愛の場合と、性

別の自認が「身体的性別」と異なることを一つの大きな特徴とするトランスジェンダーとは別物である、という認識を広めること自体が、運動の大きな目標であった（吉永（2000）などもこの認識をもとに記述を行っている）。したがって、例えば「女性の身体で生まれてきた」人物が自身の性別を男性と自認しており、かつ男性に性的な興味を抱く場合のように、トランスジェンダーでありかつ同性愛者である、という事態は十分ありうる。両者は階層の異なるものと捉えられているのである。

第二に、少なくともトランスジェンダー〈当事者〉の間においては、トランスジェンダーの多様性を認識することの重要性が理解されるようになってきた。特に性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律（以下「特例法」）が2004年7月16日に施行されて以降、逆説的にも外科的な処置を望まないトランスジェンダー〈当事者〉が可視化されるようになってきた。佐倉も著作中で分析している針間・相馬（2004）には、外科的処置を行わない、またさらにはホルモン投与も行わないトランスジェンダーの人々の語りが収録されている。

用語における統一もある程度はかられてきている。性別の自認に関して何らかの違和を感じる人を広義のトランスジェンダー（以後トランスジェンダーと表記）として総称し、それに対してトランスセクシュアル（社会的な性別と共に、身体、特に性器の転換を望む人）、（狭義の）トランスジェンダー（異性の性役割を持ちたい人）、トランスヴェスタイト（異性装・異性装者）という下位カテゴリが区別されるようになってきた（この分類は虎井（2000: 5）による）。性同一性障害はトランスセクシュアルという概念と重なるものの、医学における用語

のため、トランスセクシュアルとは位相のややずれるものと考えるべきである。

続いて『性同一性障害の社会学』を要約し、その意義を確認しておく。この著作は佐倉の修士論文（第1部）と各種の論考（第2部）が併録されたものであるため、各部分ごとに要約する。

第1部は「社会現象としてのトランスジェンダー」と題されている。第一章では針間・相馬（2004）に収録されたインタビューを分析し、トランスジェンダーの諸特徴を簡単にまとめている。第二章ではトランスジェンダーの人が日常生活で感じる困難を列挙し、ジェンダー秩序・ジェンダー体制（江原由美子）という言葉を用いて説明している。第三章ではトランスジェンダーをめぐるいくつかの語り（「トランスジェンダーはまちがった身体で生まれてきた」「性自認はあらかじめ決まっている」など）に対して疑問を呈し、佐倉自身の説を展開している。第四章ではトランスジェンダーという現象を通じて現在の日本のジェンダー体制について考察している。

第2部は「学際的トランスジェンダー考」と題されており、佐倉の大学院在学中のレポート（を元にした文章）が10編収録されている。臨床社会学、レイベリング論、学校などさまざまな切り口からトランスジェンダーおよびジェンダーの問題について述べられている。

全体を通して一つの筋を形成している著作ではないため要約は難しいが、それでも通底している要素として、二元的なジェンダー体制への批判的な眼差しを挙げることができるだろう。トランスジェンダーについて語られる際、トランスジェンダーの人々は「まちがった身体で生まれてきた」（p.67-71）のであり「最終的に男

／女になりたい」、というレトリックが往々にして用いられてきた。それゆえ、トランスジェンダーの人々は二元的なジェンダー体制に固執する「反動的な」人々だ、というレッテルが貼られることもあった。しかしこのレトリックに対し、佐倉はまさに〈当事者〉として疑問を呈する。佐倉の主張するのは、トランスジェンダーの人々の多様性を認識し、男や女ではなくトランスジェンダーとして生きることを認めるべきだ、ということである。「トランスジェンダーは決して「女」や「男」になりたいわけではない」(p.149)のである。今まで「硬直的で二元的な性別体制」の担い手として批判されがちだったトランスジェンダー像をまさに〈当事者〉の手で、しかも社会学というアカデミックな領域において転換させたことの意義は、(その文体の平易さを内容の薄さに短絡させることなく)正当に評価されなければならないと考える。

## 2 個体化主義という問題

しかし、佐倉の記述にはいくつかの問題点が存在する。そして評者の考えでは、それらの問題点は佐倉自身がトランスジェンダーをどのようなものとしてしか捉えられていないかという問題に結びついている。以下、佐倉のトランスジェンダー観を個体化主義と名づけ、これが具体的な叙述のレベルでどのような問題を引き起こしているかを解説していく。本章では評者が個体化主義と名づけるところの問題について述べる。

評者が個体化主義と呼ぶ問題は、佐倉自身の記述における「なりたい自分」あるいは「自分に合った選択」というレトリックに関連してい

る。修士論文の結論とも言える、第一部の最後の二段落を見てみる。

なりたい自分になりたいという思い、それを実現しようという情熱。すべての人のそれは、尊いものであるはずである。また、あるべきである。

願わくは、できるだけ多くの人が、なりたい自分になれるように、と祈って、本稿の締めくくりとしたい。(p.118)

トランスジェンダーに限らず、さまざまな抑圧や差別によって自由な生を享受できない人がよりよき生を送れるよう求めるここでの佐倉の主張に、評者は全面的に同意する。それはまた、トランスジェンダーをめぐる運動が地道に主張してきたことでもあるだろう。しかし、佐倉のこの著作においては、「すべての人」が自分に合った選択をし、「なりたい自分」になるべきだと、という一般論ではなく、よりトランスジェンダーに特化した負荷を掛けられた主張をもがなされている。

トランスジェンダーとは単に、自分に合った選択に対して、他人よりも少しだけこだわりが強いだけのことである。それを、何か特別なスゴイことに祭り上げてしまう現状は、やはりどこかおかしい。(p.66)

この記述は、トランスジェンダーの人々の語りを分析することによって明らかになった諸問題は同性愛者などにもあてはまるゆえ、トランスジェンダーのみの問題とすることはできない、という指摘の後にある。したがって、論理的な流れを踏まえれば、この記述はセクシュア

ルマイノリティはみな既存の固定的な性規範に不自由を感じているが、その中でも特にトランスジェンダーが自分に合った選択に対してこだわっている、ということの指摘なのである。トランスジェンダーは他の性的マイノリティよりも「なりたい自分」に強く執着する、という判断がここでは述べられている<sup>2</sup>。

そしてまた、佐倉の用いる「なりたい自分」というレトリックには、もう一つの含意がある。以下のような記述にそれは現れている。

たしかに、筆者（評者注：佐倉自身のこと）“〈性他認〉が女性”となるようなジェンダー表現をおこなっているのは、（…）女性ジェンダーの外見表示規則に従っていたほうが、他者からの自分に対する認識が、自分にとって望ましいものになり、自己実現上有利であるという理由もないではない。

しかし、いちばんの理由は、結局は、自分で自分を好きになれる、そういう自分になりたいから、と言うより他はない。（p.113）

ここで佐倉は、他者に対するジェンダー表現の「理由」として、他者からの眼差しに対する応答のためではなく／に優先して、「なりたい自分」になることを挙げている。佐倉自身、「性他認」という言葉で他者の眼差しを通じた性の社会的な構築性を繰り返し強調してきたにもかかわらず、ここでこのように素直に社会的構築性に「そういう自分になりたい」という表現が対置されている。「そういう自分になりたい」ということ自体が社会的な構築物である可能性は、あらかじめ排除されているのである。いわば佐倉のここでの記述は、他者との関係性もジェンダーの社会的構築性も、「なりたい自分」

にとっては副次的な要素であり、捨象可能であるとの主張を遂行的に示している。

以上の検討をまとめると、佐倉にとっての「なりたい自分」というレトリックには2つの特徴的な負荷がかけられていると言えるだろう。「なりたい自分」は、一つには他の性的マイノリティからのトランスジェンダーの差異化の基準として、もう一つには他者との関係性に対する自己の欲望の（アプリアリな）優位性を示す表現として佐倉に捉えられているのである。

この2つの負荷は、そのまま1章で述べた2つの運動の論理と関連して問題を引き起こしている。その問題について以下述べることによって、この2つの負荷によって特徴付けられるトランスジェンダー観の問題と、それを個体化主義と名づけることの正当性を示す。

まず第1の負荷について述べる。佐倉がトランスジェンダーを差異化する際に用いる「なりたい自分」レトリックの同型の論旨が以下に見出せることを確認する。

性同一性障害は自分自身、一人だけの問題です。周りには関係ありません。愛する相手は関係ありません。自分自身が、身体的性別に一致しないジェンダー・アイデンティティを持ち、苦しんでいれば、愛する性別がどうであれ、性同一性障害なのです。

同性愛では、自分ひとりの問題ではなく、性的対象となる相手との関係性の問題です。同性に惹かれれば同性愛なのです。そのこととジェンダー・アイデンティティとは関係ないのです。（野宮ほか 2003: 23）

性同一性障害について書かれた上記の文章でも、同性愛は「相手との関係性」の問題であり、対して性同一性障害は「自分自身、一人だけの問題」であると述べられている。これはそのまま、他者との関係性よりも「なりたい自分」にこだわるのがトランスジェンダーの（他の性的マイノリティと異なる）特徴とする佐倉の議論と重なり合う<sup>3</sup>。

しかし、同性愛をめぐる議論を踏まえた場合、この議論は大変奇妙である。歴史的には同性愛こそまさに個人の「内面」（「人格」という言葉はまさにそのような意味を持たされている）に根ざす現象として捉えられてきたのであり、今でもその感覚は根強いのである。そして、同性愛を巡る社会学的な議論は、同性愛という現象をこのように個人の「内面」に本質的に根ざす欲望に還元してしまうレトリックを文脈化し、相対化し、むしろそのレトリックから距離を取ろうとしてさえいる。したがって、同性愛は「関係性」の問題であるということはいかなる意味でもアプリアリな真実ではないし、翻って同性愛と比較されるトランスジェンダーが「なりたい個人」の問題に還元されることも自明ではない。むしろ、トランスジェンダーを同性愛から差異化しようとする分割の試みによって、トランスジェンダーは「自分自身、一人だけの問題」として発見されているのである。

とするならば、トランスジェンダーの特徴として「なりたい自分」というレトリックを用いるのは、それ自体が遂行的にトランスジェンダーという現象を個人の中に閉じ込めていく（＝個体化）身振りであると言えるのではないか。言うまでもなく、事態が個人の中に閉じ込められれば、トランスジェンダーを排除したり限定つきで「理解」したりする社会そのものについ

て捉え返す言葉はその行き場を失う。さらには、トランスジェンダーはトランスジェンダーの個人個人（まさに「個体」）の問題であり、「マジョリティ」の側の問題ではない、という帰結すら生んでしまうのである。社会を問わず、マジョリティの立場を脅かさずにセクシュアルマイノリティについて語ることを可能にしてしまう個体化のまなざしの危険性を認識するならば、トランスジェンダーに特権的に「なりたい自分」レトリックを適用することは、それが運動のスローガンとして有効であったとしても、やはり問題があるといわざるをえない。本来障害という形での「個人への原因の埋め込み」を避けていたはずのトランスジェンダーをめぐる佐倉の議論が、逆説的にもトランスジェンダーの人々の個体（「なりたい自分」）をめぐる問題として語られてしまうとすれば、それはあまりにも皮肉な逆説である<sup>4</sup>。

第二の負荷について。もちろん性同一性障害など、強い性自認上の違和を感じている人に関してなら、「他者との関係性」よりも「なりたい自分」の実現を優先することは正しい。しかし、外科的処置を望まなかったり、フルタイムのトランスを望まなかったりするトランスジェンダーに対しては、この記述はむしろ危険である。性同一性障害のイメージで全てのトランスジェンダーを語ってしまうからだけではない（これももちろん危険であるが）。そうではなく、性同一性障害の人々のように強く「なりたい自分」にこだわっていない人が、そもそもトランスジェンダーではない、とされてしまう可能性があるからである。

評者の想定しているのは次のような事態である。さまざまなインターネット上のゲイサイト



に、パートタイムで女装をしたり、あるいは女性の下着を着ける欲望を語る人々が「出会い」を求めて書き込むことは、多くはないが決して珍しくもない。そのこと事態は決して悪くはないが、彼女ら（と呼んでおく）がゲイサイトにのみ出入りが可能であり、トランスジェンダーの「コミュニティ」からはじき出されている（「男に媚びてゲイサイトに書き込むような者はトランスジェンダーではない」）可能性があるのならば、問題がないとはいえない。

確かに私たちは私たち自身のジェンダー・セクシュアリティのあり方について抑圧的な「社会」に苛立ち、その改変を望む。しかしそれと同時に、その「社会」の中にある特定の「性的他者」に対し、ある種の「譲歩」をすることを自分に許している。あなたがそう望むなら髭ぐらい生やそう、あなたがそう望むならスカートくらい穿こう、そう思うことは別段特別なことではない。それは確かに私が「なりたい自分」になることを阻害しているかもしれない、しかしそのようにあることもまた私自身に許そう。そう思いながら人々は生きていくこともあるのである（もちろん、その「譲歩」をそのまま許してよいのか、という問いは残るにせよ）。

しかし、以上のような「譲歩」は佐倉の記述の枠内では捨象されてしまう。佐倉の「なりたい自分」というレトリックにおいては、「なりたい自分」が「他者との関係性」より優先されるがゆえに、そもそも他者への「譲歩」は想定されていないからである。極端な話、性別違和の問題にひきつけ、個体化を受け入れる人のみがトランスジェンダーで、少しでも「性的他者」に「譲歩」した瞬間「単なる異性愛者／同性愛者」と言われてしまう可能性すらある<sup>5</sup>。性的他者への「譲歩」を「なりたい自分」よりも優

先させてしまう、「中核群」から遠く離れた「周辺的」なトランスジェンダーは、おそらく佐倉の枠組みの中ではトランスジェンダーとは呼ばれないのだ。

それゆえ佐倉の立論は、強く外科的な処置を求めないさまざまなトランスジェンダーの人の欲求を「なりたい自分」というレトリックで掬い取るように見えて、その実逆説的に「なりたい自分」の「他者との関係性」に対するアプリアオリな優先性を基準とすることで、限りなく同性愛に近い「周辺的」な、「譲歩」するトランスジェンダーの人々、そしてまた限りなく異性愛に近い「周辺的」な「譲歩」する FtGM (Female to Gay Man)、MtL (Male to Lesbian) の人々をトランスジェンダーとして捉え損ねる可能性があるのである。

改めて個体化主義的なトランスジェンダー像についてまとめておく。個体化主義とは、①「なりたい自分」への強い欲求をトランスジェンダーの特権的な特徴とすることでトランスジェンダーを個人に内在する事態とみなし、②「他者との関係性」を優先させるようなあり方・人をトランスジェンダーという事態から排除してしまう考え方のことを指す。「自分に合った選択」「なりたい自分」というレトリックそれ自体は確かに運動の論理と親和的であり、それ自体を標語として掲げてもよいように思われる。しかしこのレトリックに依拠することにより、佐倉の立論は①社会学の旨みともいえる関係論的な視座を無視して問題を個体の内に回収してしまっている点、②トランスジェンダーの多様性とその「周辺領域」の複雑性を取り逃がしている点で、ジェンダー・セクシュアリティに関する記述としては不十分であるといわざるを得な

い。

### 3 「単なる好みの問題」？

以下、トランスジェンダーに関する個体化主義が、具体的にどのような叙述上の問題として現れているかを検討していく。本章では、「単なる好みの問題」というレトリックに関して検討する。このレトリックを読み解くことで、佐倉自身の個体化主義的な記述スタイルがなぜ問題含みなのかを、改めて指摘することができるだろう。

まず、佐倉の次のような記述から始めてみたい。

「同性愛」は、一九七五年以降 WHO の国際疾病分類で精神障害とされていたのだが、これは単なる好みの問題である、という当事者運動などを受けて、一九九〇年には同分類から削除され、日本でも一九九五年には日本精神神経学会が「同性愛」を障害とはみなさないことを決定している。(p.139 傍点引用者)

少なくとも評者の知る限り、「同性愛」の〈当事者〉運動は、「単なる好み」として「同性愛」を脱・疾病化しようとしたのではなかった。むしろ、「単なる好み」なのだから可変的であり、また変えるべきだ、という主張に対し、私たちはそのような「指向」をもつ人間であるゆえ、それを変えることはできないし、変えるべきでない、と主張してきたのである<sup>6</sup>。いわばここで佐倉は、「なりたい自分」を擁護するという自身の主張を裏付けるために同性愛の〈当事者〉運動の文脈を誤読してしまっているのである。

このことは、佐倉の著作内の別の箇所におい

て更なる問題を引き起こす。佐倉は、「本当は同性愛も異性愛もない。あるのはただ「好みのタイプ」だけなのではないだろうか」(p.192)と述べる。ここでは同性愛という「単なる好み」はさらに細分化され各自の「好みのタイプ」に還元される。と同時に、この時個々の「好みのタイプ」は（「本当は」というレトリックによって）ある種「本来性」をもったものとして立ち現れる。いわば個々の「好みのタイプ」がそれ以上遡及できない「起源」として擁護されてしまうのである。佐倉は「なぜそうまでして登山に励むのか」「そこに山があるから」というあの有名な逸話を元に、「本来自分の好きなことをするのに理由は要らず」、トランスジェンダーもまた同じである、と述べている (p.138)。それ以上理由を遡ることのできない「起源」として「好みのタイプ」「好きなこと」を置いてしまうのであれば、「単なる好み」として同性愛を捉える視点は逆説的にも再び個人の内「原因」を置くあの病理化の視点に限りなく接近することとなるのである（しかも「関係性の問題」として遠ざけられていたはずの同性愛をもが巻き添えにされている）。

ここまでの検討から明らかのように、「単なる好み」というレトリックは、「なりたい自分」をアプリアリに措定してしまう個体化主義的な考え方そのものである。しかも、佐倉は「あえて」ではなくかなり真摯に、このそれ以上遡ることのできない「単なる好み」を擁護している。佐倉自身はジェンダーを社会的構築物と捉えていると述べているにもかかわらず、ジェンダーと切り離せないはずの個々人の嗜好を「構築されざるもの」としての「単なる好み」と捉え、無自覚に前提として置いてしまっているのである。

丁寧に考えるならば、個々人の好みを擁護すべきだとする主張に、その好みがそれ以上遡れない「単なる」好みであるから、とする主張を前提させる必要はない。むしろ人々の多様な好みがどうしてこのように編成されるのかを考えることこそ、社会学がジェンダーやセクシュアリティを考えることの面白味である。したがって、「単なる好み」を擁護する佐倉の記述は、その素直さゆえ、学問的な議論としては決定的に浅いものにとどまってしまっていると言えるだろう。

#### 4 屈折して語られる「性的他者」との関係性

佐倉は第1部（つまり修士論文の）最後において「本稿では、とりわけ、性的指向を含めたセクシュアリティの総体を視野に入れた論点へ踏み込む余裕がなかったのが、筆者としては、ここまで執筆を進めた時点で、遺憾に思うところである。トランスジェンダーとジェンダーの研究には、セクシュアリティの視点も不可欠であるのは言うまでもない」（p.109）と述べる。しかし、性的指向を含めたセクシュアリティ、すなわち「性的他者」との関係性の問題を記述に組み入れた場合、「なりたい自分」の「単なる好み」のみを擁護する語りは、大きく変質せざるを得ない。「性的他者」との交渉によって、人々の「なりたい自分」像や「好み」は変化する。そして、この変化を個人の「心変わり」に還元せず、あくまで関係論的な視座において捉えることこそ、セクシュアリティについて社会的に語るということの内実には他ならない。とするならば、アプリオリな「単なる好み」を優先させてしまう佐倉の語り口は、そもそもセク

シュアリティや「性的他者」について述べようとする試みとすでに潜在的に齟齬を起こしているのである。

にもかかわらず、佐倉の記述には時折「性的他者」が登場する。したがって次のような予測が可能である。すなわち、佐倉の「性的他者」に関する記述は、個体化主義に基づくゆえにある種屈折した形でなされてしまっているのではないか。以下「家族」と「ブルセラマニア」に関する記述からこの予測を裏付ける。

佐倉は、自身の「家族」にも触れながら、佐倉は「戸籍上の夫が MtF トランスジェンダーである夫婦は思いのほか多い。筆者が個人的に知っているだけでも筆者宅を含めて数組あり、たいてい子どももいる」（p.183）と述べている<sup>7</sup>。パートナーがトランスジェンダーと知った途端その人を拒絶するといった悲劇とは異なるエピソードが取り上げられているゆえ、一見するとこの記述こそ良好な「性的他者」との関係性についてのものに見える。

しかし、ここで注目すべきなのは、この記述は、「性的他者」との関係性を夫婦、あるいは「家族」として設計した後でトランジションがなされた例のみで構成されている、ということである。佐倉の挙げる例においては、関係性が安定化しある程度の「折り合い」が付いたあとのトランジションが描かれることによって、トランスジェンダーの人々「性的他者」との交渉、そしてその中でのお互いの「譲歩」はないものとされてしまうのである。実際にさまざまな交渉がないというのではない<sup>8</sup>。個体化主義にもとづく「単なる好み」擁護の視座が関係論的視座と齟齬を起こしているゆえ、交渉に関してまるごと省略する語り口にならざるを得ないので



ある。

したがって、トランスジェンダーの人々のパートナーとの関係性が、佐倉の著作においてトランスジェンダーとその「家族」の問題として語られてしまうことは、偶然ではない。自らの「性」に関する資源を用いた交渉が終わった後（＝「家族」を形成した後）でトランジションが行われるストーリーが選択されるのは、「性的他者」との関係性（における「性」に関する資源を用いた交渉）とトランジションの過程の時期的な「ずれ」に依存して、前者を省略して後者のみに言及する（＝「なりたい自分」レトリックを貫徹する）ためなのである。したがってこのエピソードにおいては、「性的他者」の話題に触れられているように見えながらもトランスジェンダーの人々はよりいっそう個体化された者として語られていくのである。

続いて「ブルセラマニア」に関するエピソードについて述べる。佐倉は第1部の「おわりに」においてブルセラマニアについて言及しているが、その言及は大変奇妙なものである。佐倉にとってブルセラマニアは自主制服女子高生（自身の通う高校以外の制服を仕立ててもらっている女子高生）と「生まれついた性別がちがうだけで」「同じ」（P.116）だというのである。ブルセラマニアは、自身が「ブルセラ」に当たるものを身に着けたいにもかかわらず男性ゆえにそれが許されないゆえ、「それが、未成年女性を対象とした性的欲望に転化している」（p.117）。

この記述において佐倉は「女性の身に着けるものを身に着けたい男性」と「女性の身に着けるものにフェティッシュ的欲望を抱く男性」を区別していない（正確には区別可能性を認識していない）。前者に関してなら確かに自主制服女子高生と同じと言ってよいかもしれないが、

ブルセラマニアが「未成年女性を対象とした性的欲望」を持つとしたら、自身が「理想の女子高生」になりたい自主制服女子高生とは全く異なるはずである。

このような奇妙な記述が可能になるのは、ブルセラマニアにおいて「なりたい自分になれない」ジレンマが他者への「性的欲望に転化している」と佐倉が考えているゆえである。「他者への性的欲望」という関係性に根ざした事態が「なりたい自分」から導出可能であるならば、確かにブルセラマニアも自主制服女子高生も「なりたい自分」を目指す点で同じである。しかし「他者への性的欲望」が「なりたい自分」像から導出されるというのは、どう考えても個体化主義の無理やりの貫徹でしかない。逆に言えば、個体化主義のみで記述を押し切ろうとするから、このような奇妙な帰結になってしまうのである。

以上の検討からわかるように、佐倉の「性的他者」に関する記述は、自身とその「性的他者」との交渉の記述を省略し、さらに他者への性的欲望を「なりたい自分」から導出する形で成り立っている。このような語り口においてならば、確かに「性的他者」について個体化主義の枠内で記述することができるかもしれない。しかし、この枠内で語られるのは徹頭徹尾「なりたい自分」の「単なる好み」に回収可能なものだけであり、「性的他者」に関する適切な記述である、とは評者には思えない。佐倉の個体化主義に基づく「性的他者」に関する記述はやはり不十分なのである。そしてそれはセクシュアリティの視点に「踏み込む余裕がなかった」ゆえ仕方のないことなどではなく、むしろ佐倉自身の枠組みの不十分さに起因するものである。

したがって、まずはトランスジェンダーをジェンダーの観点から研究し、ついでそこにセクシュアリティの観点からの研究を付加する、というような試みは、少なくとも佐倉のような個体化主義的なトランスジェンダー研究においては遂行不可能である。その意味で、佐倉がセクシュアリティの観点の重要性を本当に認識していたのか、疑わしい。

## 5 〈性別〉は存在しない？

この章では性別に関する佐倉の記述の問題点を指摘する。

佐倉は「本当に必要なのは、さまざまな「性」のありかたが自由に存在できる、多様性の認められた社会をつくることである」(p.130)と述べる。性の多様性の豊穡を佐倉は擁護しており、評者もこれに全面的に同意する。しかし、佐倉はまた、「誰もが自由に自分の好みに合った選択ができ、そうしてなりたい自分になることができるのなら、自分の〈性別〉で悩む必要はない(というより〈性別〉自体がない)」と述べている(p.81、傍点引用者)。しかも佐倉はこの引用のちに、このような状態においては「トランスジェンダーという概念自体が成り立たない」と述べる(p.82)。これは大変奇妙な議論である。佐倉にとって性の多様性が保証された社会とは、〈性別〉のない世界のことなのだろうか。

言うまでもなく、この佐倉の記述は、ジェンダーフリーへのバックラッシュをめぐる議論での主要な争点に関するものである。バックラッシュ派が自らの主張の根拠とする「ジェンダーフリーな社会ではみなが中性的になり〈性別〉はなくなってしまう」というあの曲解と、佐倉

の議論はほとんどかわらない。私たちは人々が男であったり、女であったり、それ以外の〈性別〉でもあったり、またどれでもなかったり、さらにそれらの間を行き来することができたりするような社会を、性の多様性が保証された社会として構想することができる。それにもかかわらず、バックラッシュについて言及している(p.174-9)佐倉が、まさにバックラッシュ派的な曲解をしてしまっているとすれば、それは批判されるべきだろう。

しかしここでの問題は、佐倉の曲解そのものではない。むしろ問うべきなのは、むしろトランスジェンダー〈当事者〉であるはずの佐倉がこれほど簡単に「トランスジェンダー」や「男」や「女」という事態を否定できてしまうその「根拠」である。先の佐倉の引用(p.81)においては、「なりたい自分」が保証されれば〈性別〉がなくなる、という論理が展開されている。この論理展開自体も評者には納得できないのだが(「男になりたい」「女になりたい」という人がそれなりにいる以上、むしろ「なりたい自分」を擁護すれば〈性別〉は残るように思われる)、ここでのより根本的な問題は、「なりたい自分」が前提となって、そこから〈性別〉のよしあしを判断できるとあまりにも安易に想定されている点である。「なりたい自分」像がすでにある〈性別〉の体制によって下支えされているという視点は、佐倉からは忘れ去られている。「なりたい自分」像がアプリアリなものとして個々人に意識されていると想定しているから、佐倉はその「なりたい自分」像が成就すれば〈性別〉がなくなるなどと単純に主張できるのである。「多様であるなら性でなくてもよい」(p.63)とすら言う佐倉にとっては、性などという要素は、まして〈性別〉などは「なりたい自分」

に従属する概念でしかない。

たしかに「なりたい自分」像が〈性別〉より前に想定できるのであれば、〈性別〉などなくしてしまえるだろう。しかし、私たちは〈性別〉につねにすでに捕らわれており、その中から抵抗していくよりほかない、というのが、例えばバトラー以降のジェンダー論の一つの要点だったのではないか（佐倉はバトラーについて p.68 で言及している）。「なりたい自分」をアプリアリに想定することの問題性に気付かないゆえ、佐倉の議論は不安定で（先の p.130 の引用と p.63 の引用は、明らかに矛盾している）、奇妙なものにならざるをえないのである。

## 6 個体化主義を越えて

以上、個体化主義と評者が呼ぶところの問題が、佐倉の具体的な叙述の中でどのような問題を引き起こしているか述べてきた。まとめると、①「単なる好み」をアプリアリに前提することで、ジェンダーやセクシュアリティの社会的構築性を忘却してしまっている、②「性的他者」との関係性を「なりたい自分」に従属させることで矮小化している、③〈性別〉に関するバックラッシュ派的曲解をしてしまっている、ということになるだろう。一見口当たりのよい佐倉の叙述の特徴であるところの個体化主義には、やはり問題がないとは言えない。

しかし、このことを佐倉自身の認識の甘さに還元してしまってはならない。佐倉の論述の抱える個体化主義の問題は、トランスジェンダーという現象を（例えば同性愛と言った現象から切り離し）個体に内在する方向へ水路づけた上でその多様性を示すような磁場（その特徴は本論文 1 章にまとめられている）のうちに佐倉の

記述があるゆえに発生したものであり、その磁場とは、運動の成果を受け取る中で私たちが持つようになった、私たち自身のトランスジェンダー観を支えるものでもあるのである。つまり、佐倉は私たちのトランスジェンダー観に忠実に記述したためにむしろ個体化主義の問題を抱え込んでしまったのであり、問われるべきは私たち自身のトランスジェンダー観なのだ。個体化主義の問題を運動の不備の帰結と捉えてはならない。それは徹頭徹尾（トランスジェンダー〈当事者〉を含む意味での）私たち自身の問題なのである。

したがって、問いは佐倉自身がどのような「失敗」をしたかには回収されない。私たち読者が佐倉の著作をとるとすなりと読めてしまうことにこそ抗すべきなのだ。私達に必要なのは、「なりたい自分」の「単なる好み」を擁護し、「性的他者」との関係性などをそこから演繹するような単純な議論ではない。むしろ、トランスジェンダーの人々（そしておそらくその他のセクシュアルマイノリティ）が、時にある問題を「なりたい自分」の問題として捉え、あるいは時に「性的他者」との関係性の問題として捉える、その揺らぎをこそ見つめることが必要なのである。その時、トランスジェンダー／異性愛・同性愛・両性愛（など）という枠組みは、ジェンダーとセクシュアリティ、あるいは「個人」と「関係性」という別の階層にあるものではなく、むしろ一人ひとり人間がその間を揺れ動く、同一平面状のアリーナにあるものとして再編され、描かれるようになるだろう。「なりたい自分」といった口当たりのよい言葉が事態を単純化させて、何かを隠蔽し排除してしまうことにも私たちは気付かなければならない。

佐倉の著書を取り上げ批判的に考察してきた私たちは、個性主義が抱える問題を認識している。そしてその問題の中には、具体的な人々を取りこぼす危険すら含まれているのである。であるならば、事態の複雑さから何ものをも取りこぼすことのない次の言葉を紡ぎだすことこそが必要ではないか（それが完結することのない営為であるにせよ）。それは、「なりたい自分」にみんながなれば性は存在しなくなる、という結論よりもはるかに複雑である。しかし、それでいて豊穣な未来像を提供してくれるようにもまた、評者には思われる。

## 注

<sup>1</sup> 以下『性同一性障害の社会学』からの引用に関してはページ数のみを括弧つきで記す。

<sup>2</sup> 佐倉は「アイデンティティ」という言葉を肯定的に用いている (p.204)。

<sup>3</sup> トランスジェンダーに関する記述と性同一性障害に関する記述がぴったり重なってしまうことの問題に関しては注 4。

<sup>4</sup> トランスジェンダーと障害の関係に関連して、佐倉の著作のタイトルに関して一点補足しておく。佐倉の書籍のタイトルと各部のタイトルを比較してみればそれは一目瞭然である。つまり、この書籍がトランスジェンダーに関するものであって、性同一性障害に関するものではないのならば、この書籍は正しく『トランスジェンダーの社会学』と名づけられるべきだったのではないかと（まさしく「性同一性障害の社会学」と呼ぶうる研究として石田 (2002)。この論文はまぎれもなく性同一性障害に関する日本語で書かれた最重要文献である）。

佐倉自身は「筆者自身、過去には両者（評者注：

トランスジェンダーと性同一性障害）をほぼ同義語として用いていた時期もある」(p.13) という「自己批判」をしている。しかし一方で佐倉は「厳密な意味での「性同一性障害」は基準にしたがって精神科医が診断した病名を言うが、ここではもう少し広い概念として用いることとする」(p.159) とし、性同一性障害概念を拡大してトランスジェンダーという現象を捕捉しようとする（性同一性障害に関するあるガイドブックにも、「一九八〇年代からは「性同一性障害」が、出世以上の性別に違和感を持つ、より広い範囲の当事者を指し示す言葉として使われています」（野宮ほか 2003: 47) といった記述がある）。著作の中ではトランスジェンダーについて一貫して記述しているとも解釈可能であり、著作のタイトルに関する責任を全面的に著者に帰することが可能かは疑問でもある（出版社の意向？）が、佐倉にはトランスジェンダーの問題に対するセンシティブリティが不足しているとみなされても仕方ないとも言えるだろう。

<sup>5</sup> 全く逆に、同性愛者には性別違和が全くないとされてしまうこともある。「男性が男性を愛するホモセクシャルは、どちらも社会的な性としての男性に違和感を覚えているわけではなく、同性としての男を愛している。トランスジェンダーやトランスセクシャルの男性が、自分は女性で異性としての男性を愛する場合はまったく違う。」(吉永 2000: 28-29)

<sup>6</sup> 例えばアカーの取った「戦略的本質主義」という方法もそのような目的のもとに導入されていたと解釈可能である（ヴァンセントほか 1997）。また、インターネット上で「性的指向」「性的嗜好」「性的志向」という言葉を検索すれば、現在でも「嗜好ではなく指向」型の主張が遍在していることは明らかである。

もちろん、「指向」だったら差別はしないけれども、「嗜好」だったら差別してよい、というわけではない。

それゆえ、強固に性的「指向」を主張することに異議を唱える論者も存在する（平野 1998: 168）。そしてその異議はもっともである。何より、他ならぬゲイ自身にも好みはあり、その「嗜好」によって「性的他者」を選び好みする実践を行っている。

したがって、性的「指向」と「嗜好」は、同時には存在できないものと考えてはならない。むしろ、個人の「嗜好」と区別されるある種の集会的な事態を指し示すことができるよう、「指向」という言葉が同／異性愛という「粗雑な」分類に重ね合わせられたと考えるべきなのである。こう言い換えることができる。「指向」という言葉が個々の具体的な「嗜好」をまとめ上げるものとして置かれることによって、個々のゲイの単なる集積とは異なる形で、「性的他者」との交渉やその結果の関係性を可能にするアリーナが確保できたのである。ある種の「粗雑さ」はむしろ個々の「嗜好」にあそびをもたせるためにも必要とされているのだ。

<sup>7</sup> FtM の人が男性のパートナーに受入れられるよりも、MtF の人が女性のパートナーに受入れられるほうが容易である、という事実に関して、佐倉は「女性は、自分自身が内面化しているジェンダー秩序を攪乱させることに対して、比較的柔軟に対応できるのに対して、男性にはそれがきわめて難しい」という意味での「男女差」を指摘している（p.102）。しかし、トランジション後のカップルが“ヘテロカッ

プル”でないことを考慮すれば、これはまずは、女性にとってレズビアンとしての性的関係とそれ以外の関係性が近接している、ということの証左だとも言えるだろう。そのこと自体を佐倉のように評価しても構わないが、このような近接性は、「女性には性欲がない」というあの「神話」に下支えされた、レズビアンの人々を不可視化する圧力と共振してしまう可能性がある。MtF の人々を受入れる寛容な女性のパートナーを作り出す力自体が、異性愛主義と女性蔑視を再生産している力、すなわち竹村（2002）の言うところの〔ヘテロ〕セクシズムである可能性もある。女性の寛容さを言祝ぐだけでは不十分であることを指摘しておく必要があるだろう。

<sup>8</sup> 当然のことながら、〈当事者〉にとってこそこの問題はとても重要である。そして付け加えておこならば、佐倉自身が分析対象とした針間・相馬（2004: 163）においては、「家族とトランス、そのバランスを取りながら、より自分らしく生きていこうと思っています。」という語りがきちんと掲載されているのである。この「バランス」という言葉に込められた困難と誠実さを、「なりたい自分」という言葉で纏め上げてしまうのは、〈当事者〉にとって最も近い他者との関係性を捨象してしまうことであるように思われる。

## 文献

石田仁, 2002, 「甦るブルーボーイの〈精神〉」『法とセクシュアリティ』(1), 85-117.

針間克己監修, 相馬佐江子編著, 2004, 『性同一性障害 30 人のカミングアウト』双葉社.

平野広朗, 1998, 「闘いと癒し—異性愛強制社会と対峙して」宮台真司他『〈性の自己決定〉原論—援助交際・売買春・子どもの性』紀伊国屋書店, 135-179.

野宮亜紀・針間克己・大島俊之・原科孝雄・虎井まさ衛・内島豊, 2003, 『プロブレム Q&A 性同一性障害って何? —一人ひとりの性のありようを大切にするために』緑風出版.



竹村和子, 2002, 『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.

虎井まさ衛, 2000, 『トランスジェンダーの仲間たち』青弓社.

ヴィンセント, キース・風間孝・河口和也, 1997, 『ゲイ・スタディーズ』青土社.

吉永みち子, 2000, 『性同一性障害——性転換<sup>あした</sup>の朝』集英社.

※本論文は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の研究成果の一部である。

（もりやま のりたか、東京大学大学院総合文化研究科、e\_planeta1982@hotmail.com）

（査読者 野田恵子、野田潤）